

編集後記

編集長(ダン シロウ)

5月下旬、石川県での家族漫画展と講演会(金沢 & 津幡)の帰路、地震被災の内灘町を回り道してもらった。もう5ヶ月も経つというのに、生活道路には通行は自己責任でも言いたげな標識が設定されていた。

隆起したり、陥没したりで道が傾斜した両側に、半壊したもの、倒壊はしていないが上下に大きく歪んだ家並を見ながら進んだ。電線が低いのは、砂地の地盤に電柱が陥没しているかららしい。家の前のコンクリート石段が隆起によって軒先みたいになっていたり、反対側の地面は陥没してズリ下っていたり、とても奇妙でひどい状況だ。しかし、復旧の作業痕跡がほとんどない。実際どうなのか正確にはわからないが、放置されたままのように見える被災地だった。なかなか片付けが進まない！とニュース報道される能登半島先端の街でもない、金沢のすぐとなり。自分でなんとかしなさいの町並みだとしたら、あんまりではないか。

*

通巻57号とは、一年4冊発行のマガジンが、15年目に入ったということだ。同じ顔ぶれの編集メンバーでこの年月はなかなかだと思う。マンネリ化、老化などと言うこともできるのだが、世の中をご覧になると良い。

まあなにも長続きしない、国を挙げて「朝令暮改」の令和の御代である。出来るものなら、どこか一所に腰を据えて、堂々たるマンネリを実現してみられたらよからう！それを一所懸命というのである。

などと最近 Audible の時代小説にどっぷりなもので、かような口調になってしもうたわい。とは、何藩の侍？

編集員(チバ アキオ)

ゼミの授業で現場の方々の協力をいただいて、地域活動の現場に学生の方々と出向いた。事前学習では、その活動を支えている福祉専門職から講義と演習をしていただいた。学生もグループに分かれて積

極的に地域活動について考え、相互に発表した。そして、実際に地域活動に参加。介護予防を目的にした活動の現場へ。プログラムはチェアヨガ、椅子に座ってできるヨガだった。地域の方々が20名以上参加。私たちもいっしょに体を動かした。

チェアヨガは初体験。目的をご高齢期に感じる体の不調をテーマに絞って、体の各所をほぐし、のばして、呼吸を整えていった。普通のヨガのような転倒リスクやけがのリスクはしっかり押さえながら、ヨガの効果を最大限に生かしているように感じた。

地域の方々とともに終了後、話す機会をいただいた。学生さんにもたくさん話しかけてくれてありがたい。地域にもいろんな方がいること、それはクラスにもいろんな学生がいるのと同じだよと話してくださった。ヨガは女性に人気で、男性に人気なのはグランドゴルフや筋トレと教えてくださった。地域にある、関連店舗やインストラクターの方々とつながり、そういった地域づくりに福祉の専門職の方々も汗をかく。大事なのは「持ちつ、持たれつ」とも地域の方は話してくださった。地域がどんな価値を持つようにするといいいかな？と考えて、そのためにはこういう機会を重ねよう…。これも編集作業と重なる。地域を現代に合わせて再編集している。ヨガもいろんな方ができるように再編集してチェアヨガになっていた。

編集もよく考えると、初回以外はすべて再編集である。編集後記も厳密にいうなら「再編集後記」だろう。そして、わたしたちも再編集を重ねているのが生きるということだよねと思った。また再編集を重ねよう。

編集員(オオタニ タカシ)

今号のマガジンは休載になった原稿が比較的多くなりました。その理由として一番大きな割合を占めたのが体調不良によるものだったそうです。私自身、短信に書いた台湾旅行の後、コロナを発症してしまい、気管支拡張症を診てもらっている主治医には若干呆れられました。何かしら体の不調を抱えたり、“健康”を意識せざるを得ない年齢にはなってきましたが、編集会議での話題も経て、健康を“目的”にするか“手段”にするかで、生き方や考え方が違ってくるのかもしれないと思いました。今の仕事量をこなすには、それなりの体力も必要ですし、少なくとも当面は今くらい

の仕事はやっていきたいと思っています。そうすると“健康”はある程度必要な条件になってくるので、何かの足しになればと筋トレやランニングをできる範囲でやっています。

大学の授業の中で、木陰の物語の「宿題」のYouTube動画を視聴して、それから『いつもならやらないことを何かひとつやって、その結果を報告してもらう』という課題を出しています。単に知識を問うようなレポートを出したくなかったのと、気持ちで自分の行動を縛ってしまっている学生も多いと感じる中で、わすかなことかもしれないけれど、自分で変化を起こせるし、気持ちだって自分で変えられるということを実感してほしいと願ってこの課題を選択しています。

今回も、学生さんたちはそれぞれ等身大で小さな変化を起こすことに取り組み、その結果として自身の気持ちや周りとの関係に小さな変化を起こせたことを、生き生きと楽しく報告してくれました。明るい展望が見えにくい時代ですし、できることは限られているのかもしれませんが、それでも小さな変化を積み重ねていく中に希望を見つけていきたいと思います。

対人援助学マガジン

通巻57号

第15巻 第1号

2024年06月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第58号は2024年9月15日

発刊の予定です。

原稿締切2024年8月25日！

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。

必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。執筆資格は学会員であること。現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

人は描かずにモノだけを描くことは少ない。だからたまにそんな仕事をする、なんだか上手く描けている気がする。

ランドセルなんて描いたことは一度もなかった。写生するつもりで写真を見ながら描いたが、出来上がりは満足だった。

もともと絵が上手なわけではないので、モノがちょっと上手く描けると嬉しくなる。このランドセルは自著「わが子が小学校に上がる前に読みたい木陰の物語」の表紙のために描いた一枚だ。

近年、外国人旅行者にランドセルが人気だとか。大昔、フランスのリセの女学生が使っていた背中にも背負える通学バッグを、子ども達の土産にパリのプランタンで購入したことを思い出した。

2024/6/15